

紀 要 委 員 会

委員長 薄井 明
委員 八木こずえ 御厩美登里
佐藤 園美 志水 朱
井上 貴翔

編 集 後 記

今年も12月20日の発行日に無事『看護福祉学部紀要』を刊行することができました。コロナ禍の厳しい状況の中、投稿してくださった先生方には心から感謝申し上げます。

激動・激変の一年でした。日本では今年初めに感染拡大が始まった新型コロナウイルスが本当に「パンデミック」になるとは、正直、1月・2月時点では思っておりませんでした。新型コロナウイルスの急速な感染拡大に伴って私たち大学教員に一番変革が強いられたのは「遠隔授業（オンライン授業）」に関わるICTの知識と技能の習得でした。幸い本学ではZoomミーティングを使った統一的な実施の運びになり、その点では比較的円滑に遠隔授業へ移行できたと思いますが、それでも相当な“負荷”がかかりました。ただ、そうした経験によってICTの知識・技能レベルはいやが上にも向上したと思います。今年の1月時点で「Wi-fiって何?」と言っていた私が、曲がりなりにも自分でZoomミーティングを開いたり、Googleフォームで学生の出席を取ったりできるようになったのですから。10年間で起こる変化が1年間で起こる「ICT革命」が私の身の上にも起こったわけです。これは今年の私の収穫といえるでしょう。

コロナ禍は私たちの「研究」にも影響を与えました。遠隔授業の準備に費やされる労力は、従来の対面授業の準備に比べて、格段に大きくなりました。「教育」での労力の増大によって「研究」に割ける時間やエネルギーが削がれたことは事実です。フィールド調査をベースに研究されている先生たちにはデータ収集の面で大きな制約も出てきたでしょう。こうした状況の中、紀要委員長としては「『看護福祉学部紀要』の投稿希望者が極端に少なくなるのではないかと非常に心配しておりました。しかし、それは杞憂でした。例年とほぼ変わらない6本の投稿があり、刊行作業もスケジュール通りに順調に進みました。「教育」をきちんと行うだけでも大変な状況の中で「研究」もしっかり行っている看先生方に看護福祉学部の“底力”を見たような気がしましたし、誇らしく思いました。

新型コロナウイルス感染の「収束」「終息」はまだまだ先になりそうです。でも、必ず収束します。昔話を語るように「新型コロナウイルス感染、大変だったよね」と語っている私たちの姿を想像しながら、自分が今すべき課題を一個一個こなしていこうと自分を叱咤激励している2020年の年の暮れです。（薄井明）